

簡易版

「現代の僧侶」を考える － 検討結果資料

作成：現代の僧侶を考える会
（監修：一般社団法人お寺の未来）

「現代の僧侶を考える会」の趣旨

人口減や過疎化による檀信徒の減少、僧侶派遣業者の台頭、葬儀の小規模化・簡略化など、お寺、そして僧侶を取り巻く社会環境は急変しています。

日本仏教を担う核心は、檀信徒をはじめとした生活者に仏教を伝える一人ひとりの僧侶です。現代における僧侶像や求められる規範を僧侶自身が主体的に明らかにし、その規範を主体的に励行することにより、社会や生活者からの信頼は一層醸成され、日本仏教の豊かな味わいが次世代に受け継がれることにつながっていくでしょう。

「現代の僧侶を考える会」では日本仏教のこれからを担う仏教者有志が集い、生活者視点をまじえながら広く闊達な衆議を深め、これからの僧侶像と具体的な規範を宗派・肩書き・立場を超えて定め、現場での着実な実践と、現代的な布薩の創造につなげていくことを目指します。

僧侶像・規範の検討にあたっては、委員会メンバーを中心に2016年10月から全13回(50時間超)の議論を重ねるとともに、2017年3月には東京で約90名、7月には約40名の僧侶有志をまじえて一層の議論を深めました。

今後は、様々な有志・団体との連携を通じて、本会の願いや検討結果を広く共有していきます。

【委員会メンバー(立ち上げ時)】 ※順不同

[座長] 岡澤慶澄(真言宗智山派 長谷寺住職)

[委員] 網代豊和(浄土真宗本願寺派 西照寺副住職)、久住謙昭(日蓮宗 妙法寺住職)、倉島隆行(曹洞宗 四天王寺住職)、成田淳教(浄土宗 感応寺住職)、細川晋輔(臨済宗妙心寺派 龍雲寺住職)、渡邊元浄(真宗大谷派 正蓮寺住職)

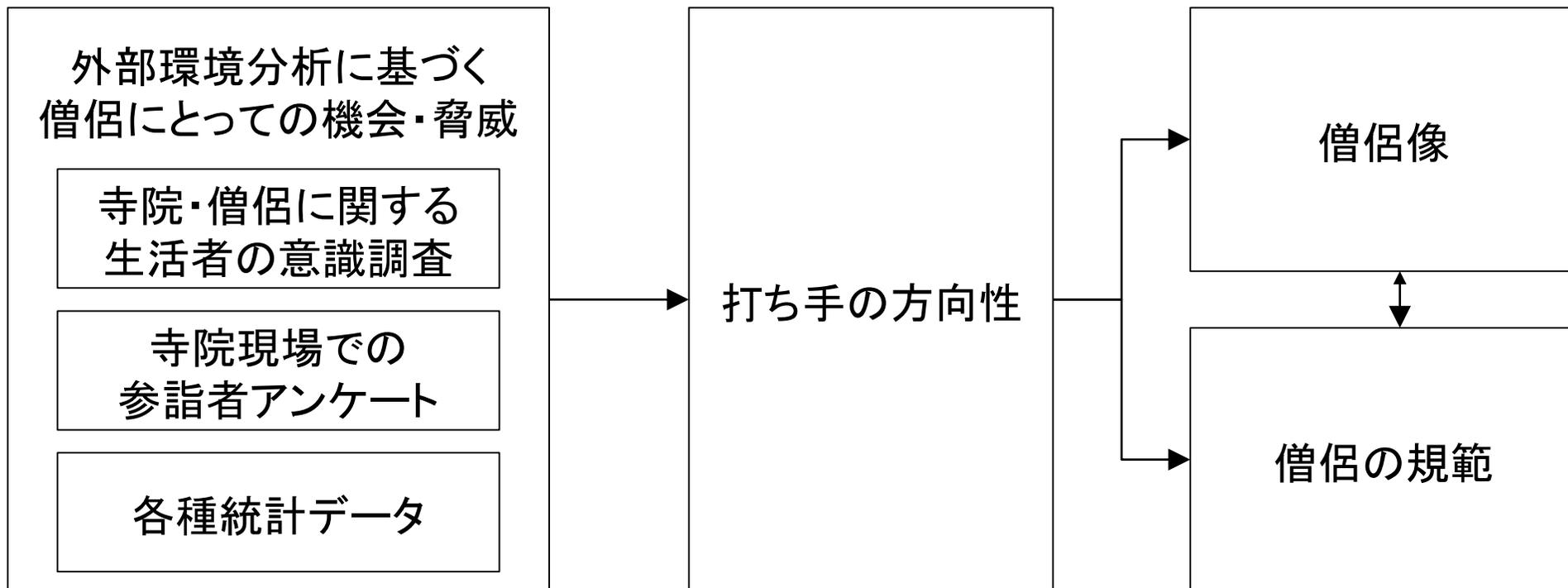
[事務局長] 井出悦郎(発起人:一般社団法人お寺の未来代表理事)

[顧問] 松本紹圭(未来の住職塾塾長)、松島靖朗(おてらおやつクラブ代表)、木原祐健(神谷町オープンテラス店長)

[生活者] 遠藤卓也(まいてら編集長)、松崎香織(未来の住職塾事務局長)

検討の進め方

本会では、受け手である生活者視点をふまえた外部環境分析を起点に、これからの「僧侶像」と「僧侶の規範」を具体化しました



宗派・立場を超えた多様な視点による
寺院・僧侶の現場実態に関する知見・情報

「僧侶像」と「僧侶の規範」の考え方

【僧侶像の考え方】

僧侶の多様性を大切にするため固定的な僧侶像は定義せず、それぞれの僧侶が規範をふまえた上で、自らが目指したい僧侶像を主体的に定めることとします

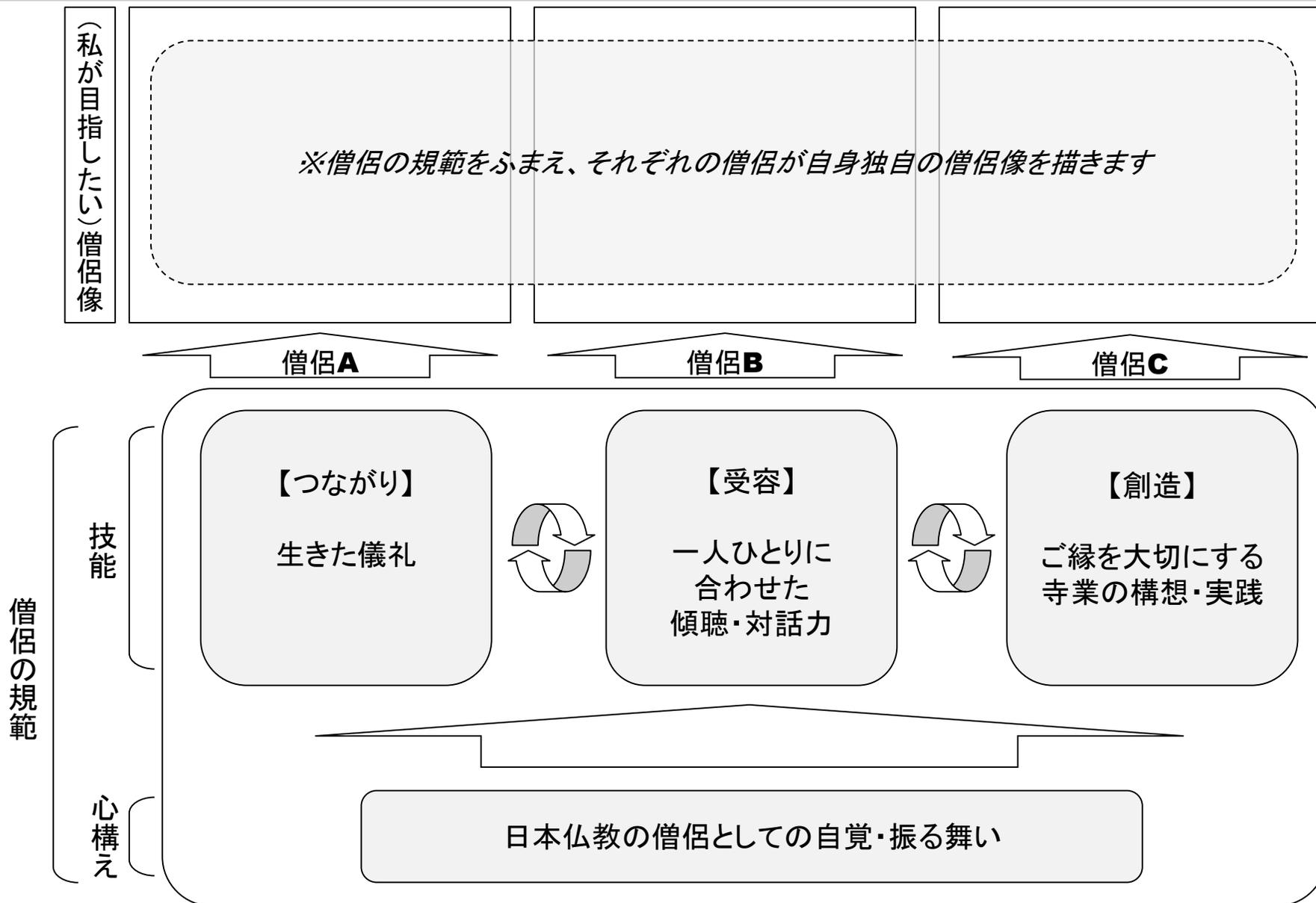
※僧侶像を定める際は受け手視点を大切に、生活者(檀信徒や地域住民)の声に耳を傾けましょう

【僧侶の規範の考え方】

僧侶に求められる規範が、精神論と技能のいずれにも偏らない中道として機能するよう、規範を「心構え」と「技能」という構造で決めました

- 「心構え」は、日本仏教における僧侶が、僧侶たる所以として有すべき共通要素とします
- 「技能」は、宗教の基本機能である「つながり」「受容」「創造」の視点から、基本的な技能を絞り込んで定義します
 - 三つの技能は、全てを完璧にするというよりも、僧侶が自身の得意分野として特に伸ばしたい技能を見つける羅針盤としています
 - 三要素に含まれない自身の得意な技能は、僧侶像を具体化するにあたっての自身の特長として積極的に加味することとします

「僧侶像」と「僧侶の規範」の構造



.....

「僧侶の規範」の具体的内容

※規範の詳細な内容は、解説版をご参照ください

僧侶の規範

規範の具体的内容

心構え

日本仏教の僧侶としての自覚・振る舞い

- ・僧侶として、あらゆる物事の判断軸や、他者との共感・関係構築のためにも、慈悲を根幹に据える
- ・日本仏教における「ご縁」の豊かな意味合いを知悉し、ご縁を大切にし、信頼する姿勢を持つ
- ・別途の信仰心を深めるとともに、人々の苦悩への向き合いの幅を広げるため、通途への理解を深める
- ・見えない速度でゆるやかに変化するものを守るため、超長期視点で物事を考える
- ・日本仏教には挑戦が求められている。出家者たる僧侶は、当然のことながら「挑戦心」を持つべき
- ・地域からの信頼を前提に、仏教的な生き方を地域に示すリーダーシップを発揮する
- ・社会規範を順守する一方、出家的価値観を持つことで有事にこそ価値を出し得るため、目指す僧侶像を明確に持つ

つながり

生きた儀礼

- ・浄土の仏が目前にいるリアリティ(共同幻想)を醸成すべく、儀礼の細部にこだわり、意味性も伝えながら儀礼を進行する
- ・選択肢に溢れる世の中だからこそ、「定番」が価値を持つ。定番である伝統的な儀礼の型が、価値あるものとして選ばれるよう、定番に関する物語を強化する
- ・新たな定番となりうる圧倒的な感動のある宗教儀礼を生み出すため、儀礼の意味性を知悉する

受容

一人ひとりに合わせた傾聴・対話力

- ・慈悲の表れとして、他者のことを自分事として真心で接する
- ・まずは相手の言葉を傾聴して受容。対機説法に移行しながら対話で気付きを促す
- ・仏法・本尊の本願を伝える表現力の基礎は教義・教学だが、伝え方を一人ひとりに合わせて工夫(方便)する
- ・言語ではなく、行為そのものをもとにすることも、相手を受容することにつながる
- ・仏さまに見守られている安心を感じ、参詣者の手が自然と合わさり、対話が自ずと生まれるよう、本堂・境内を整える

創造

ご縁を大切に作る寺業の構想・実践

- ・慈悲を根本とすれば、慈悲の具体的な表れは機会・環境に応じて異なっても良い
- ・寺院の信頼を活かし、死後の安心にもつながる生前からの関係性づくりを促進する
- ・法定相続は家族の縁が切れる争族となるため、仏教的価値観や永続性という強みを活かし、お寺が相続に関与する
- ・お布施が地域社会に循環し、創造につながる新たなご縁が巡る物語を、檀信徒や地域社会に伝えていく
- ・ご縁の豊かさの中に生きるいのちに一人ひとりが気づいてほしいと願い、様々な寺業を構想・実践する
- ・伝統的家族観が廃れる中、お寺の緩さを活かし、血縁を超えた疑似家族的な共同体感覚の形成に寄与する

【参考】社会環境変化をふまえた機会・脅威に対する打ち手の方向性

僧侶像と規範の検討過程では、現代の社会環境変化を様々な視点で見つめ、寺院・僧侶にとっての機会・脅威に対する打ち手の方向性も検討しました

方向性1: 急変かつ多様化する死生観への個別対応

- ・イエの不継承、単身世帯、未婚者・無子者、性的マイノリティなど、伝統的な家族観で包摂されない人が増加
- ・加えて、50歳代以下の世代で「あの世」を信じる人が増加し、60歳以上の世代とは逆転現象
- ・仏教的価値観やお寺の共同体感覚を活かし、多様化する個々人の死生観への柔軟な対応が必要

方向性2: 「型」の本質を基盤とした世俗化への積極対応

- ・世俗化の流れは、日本仏教への追い風とも捉えられる。日常で宗教儀礼・体験との接触が増えれば、寺院・僧侶が受容してくれる存在という認知も広がりうる
- ・世俗化に対応する一方、僧侶の本分は型の伝承であり、型の本質を知り尽くし、励行することも求められる

方向性3: エンディングステージにおける価値提供の仕組み再構築

- ・争族にもなりうる法定相続の時代に、相続の仏教的意味合いや、お寺が永続主体であるという強みの点から、お寺が相続に積極関与する意義は大きい
- ・寺院の信頼を活かし、死後の安心にもつながる生前からの関係性づくりを促進する取り組みを強化する必要

※各方向性の詳しい内容は、「詳細解説版」をご参照ください

※本検討にあたっては一般社団法人お寺の未来が実施した「寺院・僧侶に関する生活者の意識調査(2016年12月)」も重要な参考資料としていますので、あわせてご参照ください